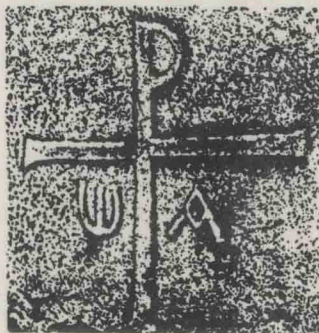


雅歌注解・講話

オリゲネス
・小高毅訳

キリスト教古典叢書 10



上智大学神学部編
P. ネメシエギ責任編集
創文社刊

雅歌注解・講話

オリゲネス

上智大学神学部編
P.ネメシエギ責任編集
創文社刊

小高毅 (おだか・たけし)

1942年生まれ。

1976年聖アントニオ神学院 (哲学・神学) 卒。

1978—1980年 Augustinianum, Institutum Patristicum (Roma)
に学ぶ。

1984年上智大学神学部神学博士。

〔訳書〕 オリゲネス『諸原理について』『ヨハネによる福音注解』『折り
について・殉教の勧め』『ヘラクレイデスとの対話』『ローマの信徒への
手紙注解』『聖霊論』(以上創文社), リュバク『カトリシズム』(エンデ
ルレ書店)

〔著書〕『オリゲネス』『古代キリスト教思想家の世界』(以上創文社)

雅歌注解・講話〔キリスト教古典叢書10〕

1982年5月20日 第1刷発行

ISBN4-423-39210-0

1993年5月30日 第2刷発行

編 集 者	上智大学神学部
編集責任者	P・ネメシエギ
訳 者	小 高 毅
発 行 者	久保井 浩 俊

定価 3605 円 (本体 3500 円)

発 行 所 株式会社 創 文 社

本 社 〒102 東京都千代田区一番町 17-3

仮事務所 〒112 東京都文京区関口 1-44-7

電話 03-3235-4361

Printed in Japan

著作権者との申し合せにより検印省略

暁印刷・鈴木製本

序言

言

言葉は、人の存在そのものから湧き出るときにこそ真正であり、永久に新鮮味を保つものである。古代キリスト教の大思想家オリゲネスの言葉も、そのようなものである。したがって彼の言葉は、一七〇〇年の隔たりを越えて今日でも読者の心を打つのである。聖書の中でも全く特殊な著作である雅歌についての彼の注解と講話に関して、特にこのことが言える。現代の聖書解釈者たちは、雅歌から主に誠実な恋愛の賛美を読みとっており、そのような解釈にも確かに意味がある。しかし、オリゲネスのように、雅歌に基づいて絶え間なく神を追求する人の精神的な歩みに光を当てることも、それと同様に、否、それ以上に重要なことである。というのは、究極的なものとの正しい関係なしに人間の相互関係も正しくなりえないからである。オリゲネス自身、人間関係の基礎となっているこのような神との関係を常に追い求める人であった。民数記講話において、彼は次のように言っている。「神の知恵には、限界があるでしょうか。人は、それに近づけば近づくほど、そのうちに深遠を見いだし、それを探求すればするほど、神の知恵が名状し難く、理解し難く、評価し難いものであることを発見します……知識の火によって燃えている魂が、ゆっくりと休むことができる時は、いつまでも来ません。魂は常に、善からいつそう善いことへ、いつそう善いことからそれをさらに越える高いところへ進むように刺激されていきます。」（一七・四）

このような歩みの到達点は、神との完全な統合である。オリゲネスはさらに述べている。

「神が個々のものにおいてすべてとなられるのは次のようなことである。即ち、あらゆる悪徳のかすを清めら

れ、あらゆる悪意の霧を取り払われて、理性的精神が考えたり、理解したり、思惟したりすることのすべてが神であり、神以外の何ものをも考えず、神を思惟し、神を見、神に固着し、神がそのすべての動きの基準及び規範であるということである。」(『諸原理について』三・六・三)

ところで、このように神と一体となった人——あるいは少なくとも、そうなるように極力務めている人——は、神に倣うことを何よりも強く望むであろう。それでは神を模倣することとはどのようなことであろうか。オリゲネスの説明を聞いてみよう。

「神はいつ人の父となるのだろうか。それは人が掟を守るときである。そのことによって前に天の父の子でなかった人は父の子となり、そのとき父は自分の子となる人を再生へ導き、この人の父という名を受ける。……しかし、神の子となるためには、通常の掟を守るだけでは不十分で、ある特にすぐれた善行を行なう必要がある。事実、マタイ福音書には多くの掟のうちのひとつだけに、『それでこそ、天にあるあなたがたの父の子どもになる』ということばが付されているのである。それは、『私はあなたがたに言う、自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい』という掟である。なぜなら、すべての被造物を愛し、自分が作ったものの何ひとつとして憎まず、すべては自分のものであるからすべてをいつくしみ、魂を愛する主である神に倣うことは、まさに敵を愛し迫害者のために祈る人の行なうことであるから、事実、他のすべての掟、たとえば『姦通するな』とか『誓うな』とかいう掟を守ることは、神に倣うという表現では適切に表わすことはできないのである。しかし、今取り扱っている場合では、天の父が悪い人のうえにも善人のうえにも太陽をのぼらせるのと同様に、すべての神の子らも愛をもって自分の敵を愛しながら、その愛の太陽をかれらのうえにのぼらせるのである。……また、父が義人のうえにも不正な人のうえにも雨を降らせるのと同じく、聖人も自分の祈りを、一種の雨のように、かれらのうえに降らせるのである。」(『ヨハネ福音書注解』二〇・一七)

敵にさえも及ぶすべての人に対する愛を生み出す神との一致——これは、オリゲネスが一生涯追求した理想で

あり、すべての著作、特に雅歌についての著作において彼が教えることである。小高毅氏の優れた翻訳のおかげで、日本の読者にもオリゲネスのこの励ましの言葉が響くようになったのは、まことに喜ばしいことである。

昭和五十六年十一月一日

上智大学教授

P・ネメシエギ

目次

序言	一
緒言	三
オリゲネスの聖書解釈	二

『雅歌注解』

序文	三
第一卷	五
第二卷	八
第三卷	一〇
〔第四卷〕	二七

『雅歌講話』

〔ヒエロニムスの〕序文	三
第一の講話	三
第二の講話	五

引用箇所注	二七
解説の注	三〇〇
参考文献	二八

緒言

初代教会の教父たちの中には、膨大な著作、それも超人的とも言つてよい程の教にのぼる著作を残している教父が何人かいる。例えば、アウグスティヌス、ヨハンネス・クリュソストモスがそうである。残念ながら、その多くの著作は紛失し、わたしたちはその全著作を正確に把握することができないが、オリゲネスもその中に数えることができるであろう。その教は二千とも六千とも伝えられているが、『諸原理について』『ケルソスへの反論』という初期と晩年を代表する二つの大作の他、『祈りについて』『殉教の勧め』等の幾つかの小品を除くと、その大部分は聖書に関するものである。

オリゲネスの聖書に関する著作は、二つに大別される。一つは旧約聖書の本文批判研究であり、これが『テトラプラ（四欄組対訳聖書）』『ヘクサプラ（六欄組対訳聖書）』である。これに着手されたのは二一八年頃のことであり、完成されたのはカイサリア時代も後期のことである。現在断片が残されているにすぎない。もう一つは聖書釈義の著作である。この分野での著作は、よく知られているように、『スコリア（評注）』、『ホミリア（聖書講話）』、『コンメンタリウム（注解）』という三種に大別されるが、残念ながら、完全なものとして残されているものは一つもない。しかも、ギリシア語原文で残されているものは数少なく、ヒエロニムスとルフィヌスという二人の手でラテン語に訳されたものが残っている場合が多いのである。従つて、『ヨハネ福音書注解』『マタイ福音書注解』『エゼキエル書講話』という幾つかの例を除くと、わたしたちは、オリゲネスの聖書釈義の著作を読むには、ラテン語訳に負わねばならないのである。幸いなことに、最近の研究によつて、従来、原文への忠実

さが問題視されていたルフィヌスのラテン語訳も、オリゲネスの根本思想から外れておらず、充分オリゲネスの思想をそこに汲むことができることが明らかにされた。

オリゲネスの著作は、先に指摘したようにその中心は聖書釈義であるが、数ある中でも白眉と目されるのが『雅歌注解』である。これまた、オリゲネスの著作としては例外的に「コンメンタリウム(注解)」と「ホミリア(講話)」の両方が残っているのは、この『雅歌』に関するもののみである。そして、更に興味あるのは、共にオリゲネスの著作のラテン語訳を手がけ、かつては友人であったが、後にオリゲネスをめぐって激しく対立することになる二人の人物がそれぞれ訳したものが残されているのである。ルフィヌスは「コンメンタリウム(注解)」を、ヒエロニムスは「ホミリア(講話)」をラテン語に翻訳しているが、ヒエロニムスはその訳書の序文で次のように述べている。

「『歌の歌(雅歌)』に関するオリゲネスの著作を別にして」他の著作をみましても、オリゲネスはあらゆる人に勝^{まさ}っています。この『歌の歌』に関する書では、自分自身をもしのいでいます。……それはまさに、『王はわたしをご自分のねやに連れて行かれました』という言葉がオリゲネスに実現されたと思われるほど「の素晴らしいものです」。

さて、オリゲネスが『雅歌注解』を著したのは、二四〇年頃のことと思われる⁽¹⁾。カイサリアの司教エウゼビオスは、その主著『教会史』の第六巻で、オリゲネスについて詳しく述べているが、そこで、この書の成立について次のように記している。

「当時、『オリゲネスは』アテネに赴いており、そこで『エゼキエル書注解』を完成した。そして『雅歌』に関する著述に手をそめ、第五巻まで筆を進めた。そしてカイサリアに帰ってから、それを完成し、十巻を数えた。」(VI・32・2)

ヒエロニムスも、先にあげた序文の中で、「およそ二万行にも及ぶ十巻の書で、『それを』見事に、かつ明解

に説明しています」と述べている。

『講話』に関しては、年代を推定するに足る記述をどこにも見い出すことはできないが、ほぼ同じ時期に、カイサリアで、洗礼志願者を含むキリスト信者の集会の場で、なされたものと思われる⁽²⁾。従って、いずれも、五十年代後半というオリゲネスの著作活動の中でも円熟期に記されたものである。

バシリオスとナジアンゾスのグレゴリオスの手になるオリゲネスの著作からの詞華集『フィロカリア』に収録されている断片からも推測されることであるが、オリゲネスは、アレクサンドリアで、ごく若い時期にも、『雅歌』の注解を手がけたようである⁽³⁾。それは二巻までで筆を折られたようである。オリゲネスは、『ヨハネ福音書注解』の中で、それ⁽⁴⁾『ヨハネ注解』がアレクサンドリアでの初穂であると述べている。エウゼビオスによれば、それは、オリゲネスがローマから帰って来てからのことであるので、恐らく二三〇年以後のことである。恐らく、これとほぼ同じ時期に『雅歌』の第一回の注解が試みられたものと思われる⁽⁴⁾。

このことからわかるように、オリゲネスにとって『雅歌』は特別な書である。『雅歌』は、エジプト脱出、荒野での宿営の表象のもとに展開されるキリスト者の霊的進歩、成長の最後の段階が示されるものであり、神のロゴスとの霊的婚姻が歌われるものであり、キリスト者の希望の書、喜びの書でもある。オリゲネスが、その注解、講話をどれほどの愛と喜びのうちに進め、語りかけているかは、ラテン語の訳文からも充分うかがえることである。

さて、この「オリゲネスの代表作」は、ルフィヌスの手で、四一〇年に『注解』がラテン語に翻訳されたが、それに先立って三八二年にヒエロニムスが『講話』を翻訳している。ヒエロニムスは、二つの講話を、ルフィヌスは、序文を含む第一巻から第三巻まで、そして第四巻の一部を、その晩年にシシリアで翻訳したのである。まさに、彼らのおかげで、わたしたちはこの「オリゲネスの代表作」を手にすることができるのである。これを除くと、『フィロカリア』に収録された小さな断片とガザのプロコピオスが残した幾つかの断片しか伝えられてい

ないからである。

とは言え、初代教会の教父たちの数ある著作の中でも、これほど後代に影響を与えた書も類をみないであろう。『注解』の序文で、オリゲネスは、いわゆるミシユナ（ギリシア語でデウテローセイス）と言われるラビの伝統に触れているが、『諸原理について』その他の著作からも明らかであるが、アレクサンドリア時代から、オリゲネスは、キリスト教に改宗したユダヤ人からヘブライ語と共にユダヤ人の聖書解釈について学んでいた。カイサリア時代には、ユダヤ教の会堂でラビの聖書解釈を聴聞した可能性も大いにあり得るであろう。⁽⁵⁾このようにして、オリゲネスがユダヤ人の聖書解釈の影響をある程度受けていることが認められると思われるが、逆にオリゲネスの聖書解釈がラビ達に影響を与えたことも大いに考えられることである。特に、五世紀以降のラビ達の『雅歌』解釈をみる時、そこにみられる共通性に注目して見る必要があるのではあるまいか。キリスト教界にしばつても、この書の後代への影響は大きく、決定的であるとも言えよう。初代教会はもとより、中世を通じて、あまたの『雅歌』の注解・講話・説教が試みられているが、オリゲネスの線から外れているものはごく僅かであり、その大多數が、オリゲネスの線に沿うものである。これは、東方教会はもとより、ヒエロニムス、ルフィヌスのラテン語訳を有していた西方教会にも言えることである。キリスト教の靈性史を語るには、オリゲネスのこの『雅歌』に関する著作を語らずには語れないと言つても過言ではあるまい。

ここで、西方教会への影響、特に『雅歌』の解釈という点にしばつて考えるならば、特に三人の人物をあげる事ができるであろう。いずれも中世を通して、西方教会に大きな影響を与えた大人物である。それは、アンブロジウス、大教皇グレゴリウス一世、ベルナルドゥスである。

まず、ミラノの司教であり、アウグスティヌスにも大きな影響を与えたアンブロジウスである。彼は、ギリシア教父の著作を原文で読みこなした数少ないラテン教父の一人である。彼は、特にオリゲネス並びにカパドキアの三教父の著作をひもとき、そこから多くの影響を受けている。彼自身、新旧約聖書の講話を数多く残している

が、『雅歌』に関する著作は残していない。しかし、彼はしばしば『雅歌』の言葉を引用し、それに基づいた教えを述べている。例えば、有名な秘跡に関する講話が残されているが、その中でも、しばしば『雅歌』の言葉が引用されている。例えば、洗礼の秘跡を説明している所で、次のように述べている。

「この白い衣服を、再生の泉を通して獲得した教会は、雅歌のことばで言う、『エルサレムの娘たちよ、わたしは黒い、けれども美しい』と。黒い、それは人間性の弱さによってである。美しい、それは恩恵によってである。黒い、なぜなら、みな罪人であったから。美しい、なぜなら信仰のサクラメントウム（秘跡）を受けたから。この衣服を見て、エルサレムの娘たちは驚いて言う。『白くなって上がつてくる彼女はだれだろう』。彼女は黒かったのに、どうして白くなったのだろう。」⁽⁶⁾

「一方、キリストは、自分の教会が白い服をまとうているのを見て、（……）あるいは、再生の泉で清められ、洗われた魂を見て、言われた。『わが愛する者よ、見よ、あなたは美しい、見よ、あなたは美しい。あなたの目は、はとのようなだ』。そのはとのがたて、⁽⁷⁾聖霊は天から下られた。あなたの目は美しい、なぜなら、上述のように、聖霊がはとのように下られたから。」

アンブロジウスは、他にも、洗礼・聖体の秘跡を説明するにあたって、『雅歌』からの言葉を数多く引用している。先の例からもわかるように、そこには明らかにオリゲネスの影響が認められるのである。

これらのアンブロジウスの著作に散在する『雅歌』の言葉に基づく教説は、十二世紀になって、サン・ティエリのギョームの手で、一卷にまとめられている。ここにも、後代へのその影響の大きさがうかがえるであろう。

次に、大教皇グレゴリウス一世である。彼は『雅歌』の注解を残している。一見、グレゴリウスとオリゲネスの間には何の関係もみられないように思われるが、グレゴリウスの『雅歌注解』には、キュプロスのカルボジアの司教フィロンの『雅歌注解』からの影響が認められる。フィロンは、三七四年頃死去した人物であり、エピファニオスの弟子であり友であった。勿論、その『雅歌』解釈にはエピファニオスの影響が大きい、オリゲネス

の影響をも強く受けているのである。従つて、間接的に、グリゴリウスの『雅歌』解釈はオリゲネスの影響を受けていると言えよう。

さて、最後に、中世を通じて、否、西方教会の全歴史を通して、偉大な神祕家クレルボーのベルナルドゥスである。ベルナルドゥスがオリゲネスの著作から大きな影響を受けていることは明らかである。彼のイエススの聖名への信心も、オリゲネスにまでたどることができよう。また、彼自身がオリゲネスの著作（ラテン語訳であるが）に親しんでいただけでなく、彼の修道院で共同体の朗読のためにも用いられていたことがわかる。第三四の説教で、ベルナルドゥスは「昨日朗読されたオリゲネスの講話からの引用の言葉」云々と述べており、ルフィヌス訳のオリゲネスの『レビ記』についての第七の講話の言葉が文字通り引用されている⁽⁸⁾。

ベルナルドゥスは、八六編の『雅歌』についての説教を残している。この説教の中では、オリゲネスの名は口にされてはいない。しかし、その影響は顕著である。例えば、

「みなさんすでに伝道の書をお読みになって、この世のはかなさをさと、この世の名利を軽べつておいでになることとわたしは信じます。これこそ、伝道の書が取り扱っているテーマだからです。……箴言の書のおしえにしたがつてこそ、あなたがたの人生行路も、言動も規制され、教育されて来たものではありませんか。」
そして、「……詩編の中に『雅歌』という名前ではなく、『都上ばりの歌』と呼ばれているいくつかの賛歌をごぞんじだと思います。なぜなら、各自は自分の心の中で、進歩向上をもくろんで聖性のステップを上るごとに自分の霊的昇段の源である神の栄光の賛美のために、新しい歌をうたわねばならないからです。」⁽¹⁰⁾

そして、「雅歌は、あらゆる賛歌の頂点だからです。」

「それはいともすぐれた婚礼の歌なのです——愛の抱擁のうちにうっとりとなつて二つのたましいの歌、⁽¹¹⁾ 協調のうちに一つになりきっている二つの意思の歌、二つの心の恋情を互いに交流する相思の歌なので

更に、「雅歌をうたえる人、また聞いてわかる人は、神のお恵みによって靈的生活に進歩している人だけ、じゅうぶん悟りを開いている人だけなのです。つまり、靈性の道において、年齢や年季ではなく、功德によって成人に達している人、またはもしこんな言い方が許されるなら、結婚適齢期に達している人たち、すなわち花むこキリストと結婚することができる人だけなのです。」⁽¹²⁾

とするベルナルドゥスの説明は、オリゲネスの『注解』の序文で展開されている教説を踏まえていることは明らかである。

オリゲネスは、その『注解』でつねに、花嫁を教会と魂として、それぞれに当て嵌めて説明しているのに対して、「雅歌に登場する『彼女』とはだれのことでしょう。花よめのことです。花よめとはだれのことなのでしょう。神に飢えかわいている靈魂のことです。」⁽¹³⁾という言葉に表わされているように、ベルナルドゥスは魂とキリストとの関係にしぼっているようである。しかし、第一四の説教では、ベルナルドゥスも、花嫁を教会に当て嵌め、「……キリストのからだから花よめのからだに、喜びの香油が、そのともがらにまして豊かにそそがれるのです。そのとき花よめの教会は、花むこのイエスにこういいます。『あなたの御名は、そそがれた香油のようです』と説明している。」⁽¹⁴⁾

『雅歌』の解釈でのベルナルドゥスが、オリゲネスのそれに依存していることは明らかである。単に、その解釈を汲んでいると言うだけでなく、随所に、ベルナルドゥスの説教とオリゲネスの注解との平行箇所が見い出されるのである。ある学者の比較研究によると二二ヶ所の平行箇所が見い出された⁽¹⁵⁾と述べられている。

以上、三人の人物について簡単に述べてきたが、オリゲネスの『雅歌』解釈の影響は、これらの三人を通じ、更には、偽ディオニジウス等を通して、更に広いものとなって行くのである。十六世紀スペインの偉大な神秘家アヴィラのテレジア、十字架のヨハネにまでオリゲネスの影響をみとめることができるのである。

- (1) P. Nautin によると、第一巻から第五巻までの部分が書かれたのは、オリゲネスの第二回目のアテネ滞在の時、二四五年から二四六年にかけてであり、カイサリアで後半の五巻が書かれたのは二四六年から二四七年にかけてのことである (Cf. P. Nautin, *Origène, Sa vie et son oeuvre*, Paris 1977, p. 411)°
- (2) O. Bardenheuer は「*聖ペトリ*」四四年#125456789者#12598 (Geschichte der altkirchlichen Literatur 2 [2. ed. Freiburg i. Br. 1914, p. 132])° #42° O. Rousseau の『*諸聖人の書*』(Sources Chrétiennes 37 bis, Paris 1966, p. 9)°
- (3) J. A. Robinson, *The Philocalia of Origen*, Cambridge 1893, p. 50-51.
- (4) Nautin は二二一年から二二五年の間のものと推定している。この仮説に従うなら、ローマへ赴く以前のものとあり、文字通りオリゲネスの第一の著作とみられる (Cf. op. cit., p. 250 n 32; p. 418)°
- (5) Cf. Hans Bietenhard, *Caesarea, Origènes und die Juden*, Stuttgart-Berlin-Köln-Mainz 1974; Nicholas de Lange, *Origen and the Jews* (Studies in Jewish-Christian relations in third-century Palestine) Cambridge 1976.
- (6) 『秘跡』創文社版 熊谷賢二訳 五五頁。
- (7) 同右。五六頁。
- (8) Cf. Sancti Bernardi opera V, l. Roma 1970, p. 228, 11 ss.
- (9) 『雅歌にふつ』I・1・1・2° あかし書房版 山下房三郎訳 一二頁。
- (10) 同右 I・3・10° 一四頁。
- (11) 同右 I・4・11° 二五頁。
- (12) 同右 I・4・12° 二五―二六頁。
- (13) 同右 VII・2・12° 九〇頁。
- (14) 同右 XIV・2・4° 一二二頁。
- (15) Cf. J. Leclercq, *Aux sources des sermons sur les cantiques*, Revue Bénédictine 69 (1959) p. 237-257.